

広島大学学術情報リポジトリ

——立ち上げから今後の課題まで——

上田大輔・尾崎文代

1. はじめに

容器・倉庫・宝庫などの意味を持つ「リポジトリ (Repository)」に、「機関 (Institution)」を冠した「機関リポジトリ (Institutional Repository)」とは「大学や学術機関が設けるインターネット上の電子書庫」であり、各機関の研究者による教育研究成果物を収集・蓄積・保存し、インターネットを通じて無償で機関の内外へ発信するためのしくみである。

機関リポジトリは近年日本でも導入が進み、2006年7月現在で20の大学や研究機関が機関リポジトリを立ち上げている¹⁾。広島大学では、2005年4月から機関リポジトリ構築に向けての準備作業を開始し、2006年4月に試験公開を行った²⁾。本稿では、広島大学図書館が行った機関リポジトリの構築における取り組みと今後の課題について述べる。

2. 機関リポジトリの目的

なぜ、機関リポジトリを立ち上げる必要があるのか？ その問いに対する答えは、それぞれの機関によって異なると思うが、一般的には次の3点であると考えられる。1) 機関の研究・教育成果を発信し、オープンアクセスにより共有すること、2) 電子的な研究・教育成果の恒久的な保存を行うこと、3) 研究・教育成果の可視性を高めて、機関の認知度を上げること、である。

現在の学術コミュニケーションでは、学術雑誌価格の高騰により、必要な学術情報が入手困難な

状況が生じている。そのため、機関リポジトリは、自機関の研究者の論文を無料で公開することにより、制限された学術情報の流れをオープンにし、誰もが必要な学術情報へアクセスできるようにすることが求められている。

また、学術情報の世界においては、電子媒体はまだ紙媒体ほどの信頼性を得てはいない。しかし、現実の学術情報生産の場におけるデジタル資料の増加は顕著であり、今後も増加の一途をたどることは明らかであろう。機関リポジトリは、これらのデジタル資料が紙媒体と同等の信頼性を得るために、それらを後世に確実に継承していく役割を果たしていかななくてはならない。

自機関でどのような研究を行い、どのような成果をあげているか、これを正しく伝えることはブランド力の強化につながる。広島大学のユニバーシティアイデンティティに関する調査の最終報告書では、「研究実績 (論文引用件数) などでは全国10位前後に位置付けられる広島大学が、高校や企業による評価ではより低位にとどまる原因として、情報発信力の弱さ」が一因として挙げられると指摘している³⁾。機関リポジトリは、文字どおり機関のリポジトリであり、機関で生産された研究成果を体系的に収集し、公開することによって、その機関の研究情報発信に大きな役割を果たすと考えられる。

3. どのようにして機関リポジトリを立ち上げたか？

広島大学図書館では、2005年4月に設置した

「電子図書館構築・整備委員会」の中で機関リポジトリの構築に関する検討を行い、システムの調達、学内合意形成、コンテンツ収集の課題を同時進行で解決するために、三つのグループに分かれて作業を行った。

3.1 システムの調達

システムの調達グループは、機関リポジトリシステムのハードウェアおよびソフトウェアの調査・検討・仕様の作成・調達を行った。ソフトウェアの選定は、購入・維持等の費用面、設定・カスタマイズへの対応等の技術面、インターフェース・登録や管理機能といった機能面、システムの安定性・セキュリティ・バックアップ等の安全性、サポート体制や業務の継続性等を比較検討して決定する必要がある。最近では、DspaceやXooNips等のオープンソースのソフトウェア、あるいは、オープンソースのソフトウェアをカスタマイズしたパッケージ製品、商用パッケージ製品、図書館システムのオプション等、さまざまな形態のソフトウェアが存在するので、それぞれの機関の事情に応じて選択することが可能である。広島大学では、継続性・安全性と認証システムの組み込み等のカスタマイズを考慮して、商用製品を購入した。

3.2 学内における合意形成

学内における合意形成の目的は、機関リポジトリを図書館（または担当部署）だけの事業とするのではなく、機関全体の事業として認知してもらうこと、そして、機関の研究者に機関リポジトリがどのようなものであるかを知ってもらい、この事業への協力をしてもらうことである。

広島大学では、大学全体の方針を協議する場である「大学運営戦略会議（のち企画会議に改編）」の下に設置された「広島大学における学術情報のアーカイブ化と発信に関するWG」において、2005年5月、広島大学として機関リポジトリを設置するという方針が提言された後、2005年7月、企画会議においてこの方針が正式に了承された。これによって、「大学全体の事業として機関リポジトリを認知してもらう」という目的は達成し

た。

次に学内の研究者への説明と協力依頼を行った。2005年の10月から2006年1月までの約4か月間で、すべての研究科長・学部長への個別説明と各研究科・学部ごとの説明会を約30回、そして全体的な説明会をキャンパスごとに行い、合計で約500人の参加があった。

これらの説明会では、機関リポジトリが新たな研究成果の発信ルートとなり得ることや研究成果の可視性の向上といった研究者のメリットを強調するとともに、登録の手間の軽減や図書館による許諾状況の確認といった、コンテンツ提供の敷居を低くするための説明に重点を置いた。

3.3 コンテンツの収集

広島大学における初期コンテンツの収集方針は、できるだけ多くのコンテンツを収集することの一点に集約されている。以下にその戦略を示す。

1) 体制の整備

- ・コンテンツ収集専任チーム（5名）の設置（2005年12月から2006年3月）
- ・学術情報リポジトリ専門の担当部署（2名）の設置（2006年4月から）

2) 研究者の負担を減らす

- ・コンテンツは媒体を問わない（電子ファイルでも別刷でも雑誌そのものでも可）
- ・著作権の許諾確認、登録は図書館で行う。

3) 処理の簡便化

- ・共著者の許諾確認同意書の提出を不要とする。
- ・コンテンツの提供者が著作権者である場合、公開の同意書は学位論文・修士論文・（卒業論文）のみ提出を義務化する。

コンテンツ収集の実際の作業は、研究室の個別訪問によるコンテンツの獲得、紀要・学会誌発行団体への働きかけなどを行った。獲得したコンテンツの内訳は、紀要や学内発行の学会誌等の学内刊行物と学術雑誌掲載論文が中心であり、その他に会議録や学位論文、プレゼンテーション資料、教材資料等があった。当初はセルフアーカイブが認められている雑誌論文（Green論文）の著者原稿

を収集の中心にと考えていたが、現実には予想したほど獲得できず、得られた雑誌論文の中でその占める割合は10%程度であった。

登録許諾の確認には予想以上に多くの時間が必要であった。それは、国内の学会・出版社においてリポジトリ登録に関する著作権規程が定まっていない場合が多いために個別に問い合わせを行い、その回答に時間を要したことが理由である。しかし、問い合わせた97機関のうち、リポジトリへの登録可能：52機関、不可能：3機関、保留：16機関、未回答：26機関であり、回答があった機関のおよそ95%からリポジトリの登録許諾をいただくことができた（2006年8月現在）。

4. 機関リポジトリ立ち上げ後に何をを行ったか？

試験公開からの4か月間は登録作業とコンテンツ提供者をリピーターにすることを目的としたフォロー作業を中心に行った。コンテンツ登録作業の遅れは、提供者のリポジトリに対する不信心にもつながりかねないため、迅速な登録を心がけ、登録後は、次回の論文提供をお願いした。すると、多くの場合、次回のコンテンツ提供につながっていった。

また、コンテンツが効率的に集まる仕組みを作ることなどを目的として、以下の事柄の調査・検討を行っているところである。

- 1) 学内出版物（紀要等）の電子化推進。
- 2) 学位論文、科学研究費補助金成果報告書の電子ファイル提出の制度化。
- 3) 業績データベースとの連携。

5. 今後の課題

Mark Ware Consulting の報告書では、新規コンテンツの獲得はリポジトリ立ち上げ後1か月では約2,000件だが、2か月目以降は0から500件の間にとどまることが指摘されており⁴⁾、世界のどのリポジトリでも継続的なコンテンツ確保は、リポジトリを立ち上げることよりも難しいことがうかがえる。広島大学でも、上述した効率的にコンテンツを集める仕組みを含めて、無理なく継続的にコンテンツを収集するモデルを構築し、実践し

ていくことは今後の大きな課題である。あわせて、広島大学でしか入手できない資料の収集に力を入れる等、コンテンツ収集の方向性をも考えていきたい。

また、リポジトリの信頼性を高めるためのデジタル資料の長期保存、永続的なコンテンツへのアクセスの保障やリポジトリを大学の研究成果のショウウィンドウとして機能させるためのインターフェースの問題も検討事項の一つである。

おわりに

機関リポジトリは、従来の図書館の仕事とまったく同じように資料の収集、提供、保存の役割を担う。異なるのは、今まで受身であった図書館が、学術情報コミュニケーションの舞台では学術論文の収集・公開をとおして、また、学内的には、合意形成やコンテンツ獲得活動をとおして、リーダーシップを発揮していく立場になるということである。

機関リポジトリの立ち上げや運用を行っていく場合には、予算や人員の確保、継続的な業務の遂行などいろいろな課題があるが、まずは一步前へ進むことが大切ではないだろうか。広島大学でも次のステージに向かって新たに挑戦を始めるところであり、数年後にはまた違った広島大学学術情報リポジトリの姿を見ることができればと思っている。

注

- 1) 国立情報学研究所 国内の機関リポジトリ一覧 <http://www.nii.ac.jp/irp/info/list.html>
- 2) 広島大学学術情報リポジトリ <http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/portal/>
- 3) 広島大学のユニバーシティアイデンティティに関する調査最終報告書 http://www.hiroshima-u.ac.jp/top/intro/ui/p_80a9ed.html
- 4) Mark Ware Consulting Ltd. "Pathfinder research on web-based repositories" <http://www.palsgroup.org.uk/palsweb/palsweb.nsf/0/8C43CE800A9C67CD80256E370051E88A?opendocument>

(うえだ だいすけ, おざき ふみよ: 広島大学図書館)
[NDC9 : 017.7 BSH : 1.機関リポジトリ 2.大学図書館]